

(桂枝加芍薬湯から)

**桂枝加芍薬湯** (方極文) 桂枝湯証にして、腹拘攣すること甚だしき者を、桂枝加芍薬湯之れ主さどる。

桂枝湯の証で腹が拘攣とあるから腹の筋肉がひどくつっぱっている者を治すというわけだ。しかしここに腹満という言葉がほしいな。腹直筋が固くつつ張っていることを言うけれど、腹が張ってその上に腹筋が緊張している者を治すと。桂枝加芍薬湯の腹直筋の攣急のしかたは臍から下の方が強くて、みぞおちから脇腹のあたり、つまり悸肋下はそうひどくはないんだ。

「桂枝湯方内において、芍薬三兩を加える。桂枝、大棗、生姜 (各六分) 芍薬 (一錢二分) 甘草 (四分) 右五味。煮ること桂枝湯の如にす」

要するに桂枝湯の芍薬の分量が多くなるわけだ。

第一条「本太陽病。医返って之れを下し、爾るに因って腹満時に痛む者は、太陰に属するなり。桂枝加芍薬湯之れを主さどる。大実痛する者は桂枝加大黄湯之れを主さどる」「本太陽病」とあるでしょう。太陽病というのは下してはいけない。それを間違っ下すから「医」と書いてあるんだ。「医」と書いてある時は誤治をした時です。ここでは下してはいけないのに下したことを言っています。桂枝湯とか葛根湯を使わなければいけないのに医者が調胃承気湯等で下したことを言っています。「爾るに因って」というのは下剤の効力がなくなっても引き続いてという意味です。下剤としての効力がなくなってもなお引き続いて以下の症状があるということです。たとえば「発汗して、爾るに因って汗止まず」という場合は発汗剤を使い終わって効果がなくなっても汗が出るという意味です。前の原因が去った後でもなを前の状態が続いているような時に使います。

「腹満時に痛む」とありますからここは上腹部より下腹部の張った感じがあって時々痛む。時々痛むんだからこれは太陽病ではなくて太陰病に属すんだと。だから太陽病を医者が誤って下した為に太陰病になったわけですね。それでもう桂枝湯ではだめだから桂枝加芍薬湯というわけ。芍薬の分量が増えることだけで腹が張ったり痛んだりすることを治すということだからここで芍薬の働きが考えられるわけね。さらにこの処方に飴が加わったら小建中湯になるから小建中湯も腹が張ったり痛んだりする時に使うということがわかるわけね。つまり小建中湯も太陰病の治療薬になるというわけです。

「大実痛する者は桂枝加大黄湯之れを主さどる」の「大実痛」というのは時に痛むという

状態ではなくて、痛みが強いし便秘して通じがうまくつかない。桂枝加芍薬湯の場合は便秘よりもむしろ下痢気味の傾向の時にも使えるんだ。便秘している時にも使えるんだが桂枝加大黄湯の時のような下剤を使うような強い便秘ではないんだ。便秘して腹満して痛みが出てくるといことは太陰病ではなくてむしろ陽明病に近づいてくることだから。

桂枝加大黄湯は桂枝加芍薬加大黄湯のことで芍薬を略してありますね。

だから桂枝加芍薬湯で痛みがとれないという時にはそれに大黄を1グラムから2グラムくらい加えて使います。ただ大黄を5～6グラムも使うことはありませんし多く使うことはよくないでしょう。ですから太陽病を医者下して太陰病になる場合と陽明病になる場合があることがわかるでしょう。

按語「為則按ずるに、腹満して時に痛む者は、即ち拘急して痛むなり。之れは芍薬を以て主となすのみと」

腹がつっ張って痛いという時はたいていガスが溜っておって、ガスの動きにつれて痛みが出るんだ。こういう場合は腹を冷やさないようにしてあるいは温めたほうが痛みがなくなるんだ。そしてなるべく冷たい物とか脂っこい物を食べないようにした方がいい。あまり身体が丈夫でなく胃下垂がある人で強い下剤を使うと腹がびーびー鳴って下る、しかし下剤を使わないと便が出ないというような場合に桂枝加芍薬湯だけで便通がついて気持ちがいいという人がいる。どちらかというとな陰病の患者ですからがっちりした大柴胡湯を使うような腹ではなくて、腹壁などがあまり厚くなくて虚弱な傾向がある。たいてい冷え性です。しかし桂枝加芍薬湯ではどうも通じがないという場合には大黄を0.3～0.5グラムくらいごく少量入れて使うといい。

では欄外を読みますよ。

○「太陰に属すなりの下に、旧刻には桂枝加芍薬湯之れを主さどる云々の二十字が脱す。今之れを正す」旧刻というのは前の版の類聚方のことですね。最初に出版された吉益東洞の類聚方では二十字が抜けていたので今之れを加えたというわけです。

○「この方に附子を加えて、桂枝加芍薬附子湯と名づける。桂枝加芍薬湯の症にして悪寒する者を治す。また腰脚攣急して、冷痛悪寒する者を治す」

桂枝加芍薬湯の症で悪寒がある者とか、悪寒がなくても冷え性で手足が冷える者でもいいし、足や腰が冷えて痛いとか、冷えると痛みがなを増すという時に使うといい。この場合にさらに朮を加えるということが次に出てきます。朮を加えることでさらに座骨神経痛などの痛みに応用できます。座骨神経痛の痛みでも足のつっ張りがある時には芍薬が多い方

がいいから、普通の桂枝加朮附湯よりは桂枝加芍薬朮附湯ということがあるわけね。

○「朮附を加えて桂枝加芍薬朮附湯と名づける。風湿。痛風。脚氣。黴瘡。結毒にて、骨節疼痛し、腹中拘攣し、小便不利し、肢体腫起、\_\_痺攣急等の症を治す。共に応鐘散、或は七寶承氣丸を兼用す。時に梅肉丸を以て、之れを攻める。黴瘡。結毒。沈滞して動かざる者は、十幹丸、七寶丸を、法の如に之れに用いれば、則ち動かざる者なし。また治せざる者もなし。また唯方略の如何にあるのみ」

風湿というのは今日の神経痛とかリウマチのような病気をさす。生まれつき水毒体質の人がいるがそれが湿だ。風は外邪だから。神経痛とかリウマチのような人は雨が降るといったら前の日から痛くなってくるんだ。その人の体質に湿があるから風を感じて痛くなるんだ。痛風というのは今の医学で言うところの痛風とは違って痛みが動くから痛風と言うんだ。多発性関節リウマチなどに当たる。今の痛風は血液中に尿酸が多くて特に足の指の関節に多いが腫れて変形してくるんだ。それとは別です。脚気というのも今の脚気だけではなくて足のしびれや痛む病気はみな脚気に当てているんだ。だから古い本にある脚気というのはビタミンB1が不足する脚気とは違い増す。当然今日の脚気も含まれるけど足に力がないとか足が痛いとかということも含まれるんだ。ここではむしろ足の痛い病気のことを言っている。「黴瘡」というのは梅毒のこと。「結毒」というのは骨がらみになって骨に穴が空いたり膿が出たりする第三期梅毒のこと。「骨節」とは関節のこと。「腹中拘攣」は腹が引きつれて痛い。「小便不利」は小便の出が悪い。「肢」というのは手足、「体」というのは胴回り。「腫起」というのはむくんで腫れること。浮腫ね。だから手足や身体の浮腫み。「\_\_痺」というのはしびれのこと。「攣急」これは引きつれること。その後は兼用法だ。これは吉益東洞がよく使っているが尾台榕堂も使っています。今頃漢方をやっている人はあまり使わない。「黴瘡。結毒。沈滞して動かざる者」とあるから病気が慢性化して変化がないこと。応鐘散とは芍黄散のことだな。大黄と川芎の粉が入った薬ね。東洞がよく使ったんだ。七寶承氣丸というのは七寶丸と承氣丸の二種類のことだ。梅肉丸というのは水銀等が入っている強い下剤ですね。十幹丸とか七寶丸も強い下剤です。軽粉すなわち粗製甘汞のことで水銀剤が入っています。これらを用いると病気が動いてくるわけね。「治せざる者もなし」というのは言い過ぎでそのとおりなら梅毒の患者がいなくなるわけね。あなたたちは軽粉を使ったことあるか？ないわな〜。私たちは戦前までは手に入ったから使ったことはあるけれど、三重県に宮田？だったかな。そこにしかないと言われておって軽粉を送ってもらったことがある。たしかに梅毒にはすごく効くんだよね。山田

のおやじさんの弟子かな？古い梅毒があって臍からも膿が出ていたが軽粉を使ったらすぐよくなってね。しかしこの頃は梅毒そのもので表の症状でひどいのはなくなったな。この頃のひどいのは脳梅毒とか脊髄梅毒で外に出ないで内に入ってしまうから。昔の梅毒の治療は外に出すというのが原則で外に出れば内に入らないと言われていたんだ。だから昔は鼻が取れたり喉に穴が空いたりしたけれど、内に入ったら歩けなくなったり馬鹿になったりするんだ。中に追い込んだ者に水銀等を使ったってしょうがないしね。東洞の時代は元禄以降だから梅毒が多くてこうゆう物を使う機会が多かったんだろう。吉益東洞の家方十二方というのがあるから見ときなさいよ。東洞は兼用方を使うのは毒を下す為だと言っているけど毎日服用させるのではなく五日に一度とか一週間に一度とか間隔をあけて使うんだ。間隔をあけて下すことで病気が動くんだ。動くと同時に煎じ薬を使って病気を治すんだと。そうゆう考え方ね。慢性病の中には何を持っていったって治らないのがある。その場合にはたまにこのような薬を使ってみるのも面白いだろうと思う。

**桂枝去芍薬湯**（方極文）桂枝湯証にして、腹拘攣せざる者を治す。「桂枝湯方に置いて、芍薬を去る。桂枝、芍薬、大棗、生姜（各九分）甘草（六分）右四味煮ること桂枝湯の如くにす」

第一条「太陽病。之れを下して後、脈促胸満の者は、桂枝去芍薬湯之れを主さざる。若し微悪寒する者は、去芍薬方中加附子湯之れを主さざる」

按語「為則按ずるに、拘急なきにして、故に芍薬を去るなり」

東洞は桂枝湯の中から芍薬を去ったから腹直筋の緊張のない者を治すんだと言っている。

「下して後」とあるからもはや下すべき症状はなくなっている。「脈促」とは速くて促すような脈ですね。欄外に○「弁脈法に曰く。脈来たりて数。時に一止して復来たる者、名づけて促という」というから速い脈でたまに引っかかるような脈だね。

吉本：不整脈とは違うのですか？

大塚：不整脈とはもっと頻繁に来るわ。この場合はほんのたまに引っかかるように感じるだけだ。不整脈の場合は診てるだけで速くなったり止まったりするからね。その場合は「脈結滞」と言った方がいいだろう。「胸満の者」とはみぞおちのすぐ下あたりね。

だから桂枝湯の芍薬が多い処方では下腹の張ったのを治すし、桂枝湯の芍薬がない処方では胸の張ったのを治すことが出来るとこうゆうわけだ。だから胸が張って脈が速いときには芍薬がない処方を使い、下腹が張っている時には芍薬の量が多い処方を使うから芍薬はおもりのような役目をすると考えられる。芍薬が入る処方では脈も速くないんだ。船で言えば錨

がとれたように「気」が浮かび上がってくる時に芍薬を除くんだ。さらにこれがひどくなった時には生姜と大棗も取り除いて桂枝甘草湯になって脈がうんと速くなるわけね。芍薬が入るとということは下の方へ症状が出てきて重みがかかってくる。芍薬がない処方では重みがなくなって上の方に症状が出てくると思えばいい。またこの桂枝去芍薬湯に麻黄附子細心湯が合わさると桂姜棗草黄辛附湯となるわけだ。だから桂枝去芍薬湯に附子が入った処方と桂姜棗草黄辛附湯とはひじょうによく似た処方というわけだ。麻黄と細辛がないだけでしょ。欄外に帰りますよ。

「弁脈法」というのは知っている？ 傷寒論の始めに弁脈法と平脈法とがあるでしょう。

○「下後、脈促胸満の者、発汗疏利を歴る。大勢去ると雖も、而して表症未だ爽快ならず。之れ固より輕易の症にして、故に去芍薬湯を用いるなり。微悪寒の者、汗下の後、精気未だ復さざるなり。芍薬甘草附子湯症と相似て、而してなお表症ある者なり。故に去芍薬加附子湯を以て、餘薬を芟夷し、消息して精気の旺んなるを待つのみ」

発汗疏利というのは発汗して身体の表面にある邪を去ったわけだ。そうして病気の強い勢いは去ったけれどもまだ少し表症が残っていると。そして気が上に上るから胸満するんだと。爽快でないくらいでそんなにひどい症状ではないから去芍薬湯を用いると。これでも少し悪寒する者は汗下の後の状態から精気が回復していないんだと。そしてこの状態は芍薬甘草附子湯の症によく似ていると。しかし表症があるから桂枝の入った桂枝去芍薬加附子湯を使って元気になるのを待つというわけですね。

吉本：先生！桂枝加芍薬湯の場合も桂枝去芍薬湯の場合にも「下す」ということが条文で出てきます。桂枝加芍薬湯の下した場合は誤治でしたが桂枝去芍薬湯の「太陽病。之れを下して後」というのは誤治ではないのですか？

大塚：うん。おそらくこれは誤治ではないだろうね。太陽病というのは下してはいけないことになっているけれど、ここで「太陽病。之れを下して～」とあるのは純然たる太陽病ではなかったかもしれない。そのへんのことはわからんけどね。原則として誤治は条文に「医」とか「返って」とかがある場合ね。誤治で「脈促胸満」になったとしてもかまわんと思う。「医之れを下し」というのと「医返って之れを下し」というのがあって後者の方が甚だしい場合だ。ここでは「下して後」だから誤治だとしてもそれほどひどいものではないでしょうね。

**桂枝加葛根湯**（方極文）桂枝湯証にして、而して項背強急する者を治す。

桂枝湯の症でうなじから肩にかけて凝ってくる者を治すということ。

「桂枝湯方内において、葛根四兩を加える。桂枝、芍薬、大棗、生姜（各六分）甘草（四分）葛根（八分）右六味。水一斗を以て、先ず葛根を煮て、二升を減ず。上沫を去って、諸薬を入れ、煮て三升を取る。滓を去って、一升を温服す。（水二合を以て煮て六勺を取る）覆って微似汗を取る。粥を啜るを須いず。餘は桂枝湯の如くにす」

桂枝湯の場合は粥をすすれと書いてあったが、この場合は粥をすする必要はないんだ。その他のことは桂枝湯と同じにすればいいんだと。葛根湯の麻黄のない処方だ。葛根湯を使いたいけどちょっと虚証の麻黄の使えない人の場合にいいというわけですね。

第1条「太陽病。項背強ばること凡凡、反って汗出で悪風する者を治す」

「凡凡」というのは問題があって矢数君や藤平君とだいたい漢方の臨床誌で論じたけれど、「凡」はシュと読み辞書にもないんだ。「凡」はキと読みます。「凡」は机という字でもわかるが重くて動きにくいという意味です。「凡」は羽の短い鳥がね、飛ぼうとして首を伸ばす様子のことを意味するんだ。その時にシュシュと音がするからそう発音するんだと言うんだけどね。しかし宇津木昆臺は「凡」で首が重いことだと言っている。このことに関しては漢方の臨床で藤平君が書いて、次に矢数君が書いて、それから私が論文を書いて三人で議論して、その後柴崎先生が語源の研究で一筆やったんですよ。

要するに首が凝った状態の形容だからどちらでもいいようなものだけれど。

葛根湯では汗が出ないがここでは汗が出るから傷寒論の条文では「反って汗が出て悪風～」となっているんだ。ここでは汗が自然に出るということで体表が虚していることを意味しているわけね。そうして葛根湯を使いたいけれどもそれが使えないような場合に桂枝加葛根湯を使うわけだけれどあまりこのような細かなことはやることがないね～。たとえば蓄膿症で葛根湯をやったら食欲がなくなるかな～と思えばこの処方をやればいいんだ。

麻黄を使うと胃に障ったりする場合が使いどころだね。一口に言えば表が虚している場合に使えばいいんだね。

○「痘瘡の初期で軽症の者、この方によし」痘瘡というのは天然痘のことだ。今頃は用はないけどね。「起脹貫膿の際には、桔梗・黄耆などを加える。収靨以後は大黄を加え、以て余熱を解し残毒を駆えば、則ち眼患痘癰等の厄あることなし。麻疹の初期にて軽症の者も、また之れ主さどる」収靨とはえくぼのように引っ込んでいることです。おできができた後その場所が少し陥没した状態で治りぎわだね。その時に大黄を入れて炎症を除くと。天然痘の後で眼が悪くなったりするのを防ぐんだと。麻疹とははしかですね。はしかの初期をあんたたちは見たことないかもしれないが熱が出て汗をかきます。だから麻黄を使

うようなことはほとんどない。あんたたちは子供が生まれてはしかになるだろうから気をつけなさい。後世方では升麻葛根湯をよく使うけれど。古方でいえば桂枝加葛根湯などを使うことになるんだ。それから水ぼうそうというのがある。これは天然痘のような劇しさはないが水痘と呼ばれて人にうつるんだよ。うちの孫も学校からもらってきたけれど水ぶくれになるんだ。天然痘は跡がくぼんで残るんだ。水ぼうそうには桂枝加葛根湯とか桂枝加黄耆湯を使うんだ。

伊藤：この前そのような患者さんが来た時に大塚先生は十日くらいすれば治るとおっしゃっていましたがそうなんですか？

大塚：十日もかからん。たいてい一週間でいい。ほっといても伝染病だから死ななければ治るんだ。熱も37度～38度が2～3日あるだけだからね。

○「成無己の曰く。凡の音は殊に、項を引く貌。凡は短羽の鳥なり。短羽の鳥が、飛騰すること能わず、動けば則ち先ずその項を伸引すること爾り、項背強ばる者も、動けば亦この如し。程應旂の曰く。凡凡は、俯仰自如ならざるの貌。按ずるに、素問の刺腰痛論に曰く。腰痛すること脊を挟みて痛み、頭に至りて凡凡然と。凡凡の義以て見るべしや」

成無己という人ははじめて傷寒論の注釈をした人ね。明の時代だね。だから短い羽の鳥が飛ぼうとしてなかなか飛び上がれない様子を「項背強ばる者」と形容したということだ。

「俯仰自如ならざる」とはあおむけになったりふさったりできないことだ。要するに首が凝ることね。えらいやかましいことが書いてあるが首筋が硬く凝っていることだ。

**栝 蓼 桂 枝 湯**（方極文）「桂枝湯証にして而して渴する者を治す」

「桂枝湯方内において栝蓼根二両を加える。桂枝、芍薬、大棗、生姜（各六分）甘草（四分）栝蓼根（六分）右六味。水九升を以て、煮て三升を取り、分ちち温めて三服す。（水一合八勺を以て六勺を取る）微汗を取る。汗出ずんば食頃に熱き粥を啜って之れを發す」

栝蓼という字はいろんな字があるんだ。ここでは手偏だけれど本当は木偏ではないかと思うけど。栝蓼桂枝湯という処方金匱要略に一番最初に出てくる処方だ。「食頃」というのは食事する間の時間だ。昔の支那人はご飯を食べるのにどれくらい時間かけたかな？

30分くらいかな。まあそんなところでいいだろう。そして熱いお粥をすすって汗を出すと。この頃は本当の栝蓼根をよこすようになったけれども我々が漢方をやり始めた当時はほとんど土瓜根を持ってきたんだ。関東地方には栝蓼根がないんだよね。関西には多いんだ。伊豆からこちらはカラスウリが多くてキカラスウリがないんだ。赤い実のなるのがカラスウリで大きくて黄色のいびつな形の実がキカラスウリだね。私が漢方をやり始めた時

に栝蓼桂枝湯はあまり用いなかったけれど柴胡桂枝乾姜湯を使うのに患者が皆食欲がなくなってきた不思議だと思っていたんだ。そのうちしばらく使わないでいたんだよ。湯本先生は栝蓼根を全然使わないから知らないし。そして昭和11年に拓殖大学で漢方講座を開いた時に、今は亡くなったけど薬剤師で亀田テイという漢方薬局をしていた男が来たんだ。この人は聞きに来たというよりは教えに来たんだろうな。何度卒業しても毎年やって来るんだ。そして我々が講義してたら一時間くらい遅れて靴の音をさせて教室に入ってくるんだ。そして座ると同時にさっと手を上げて質問するんだ。でも質問ではないんだ。演説が始まるんだ。ハハ・・・『近頃は皆さん栝蓼根のことを知らないから土瓜根との鑑別の仕方を教えます』とか何とかいい出してね。そんなことで私もはじめて栝蓼根のことがわかったんだ。土瓜根はひじょうに苦くていやな味がするんだ。栝蓼根はちょっと甘みがある。皮を剥いた時の手ざわりが土瓜根の方がすべすべというか滑らかなんだよ。栝蓼根の方が表面が汚いんだ。滑らかでないんだ。そんなことを彼から習ったんだ。それから気をつけて使うようになってやかましく言うもんだから問屋も本当の栝蓼根を持ってくるようになった。亀田君のお陰だけだね。栝蓼根というのは葛根とよくにて筋肉の緊張を弛める。そしてかるい口渇を治すんだ。だから条文に

第一条：「太陽病。その証備わり、身体強几几然と。脈反って沈遅、これを瘧と為す」とあるでしょう。「太陽病。その証備わり」とあるから頭痛がするとか寒けがするとかで、身体とあるから全体的に強張ってくるんだ。しかし葛根湯や桂枝加葛根湯は脈が浮いて速いのに栝蓼桂枝湯は脈が沈んで遅いんだ。このような状態を「瘧」としている。今で言うと破傷風のような、あるいは破傷風のような状態を呈する筋肉の病気を指すんだろう。破傷風に限らず瘧攣性の状態を指します。では欄外。

○「程林本には、栝蓼根を三両に作る。今之れに従う。凡そ某書に幾両に作り、今之れに従うという者は、皆その量数に従って、以て各薬の下に注す。本文は則ち一にして旧貫に仍り、下皆之れに倣う」処方分量が本によって色々違うからこの本は昔の度量衡に従うという意味です。

○「按ずるに、桂枝湯に云う。頭痛項強。桂枝加葛根湯と、葛根湯に、俱に云う。項背強几几。この方に云う、身体強ばること几几然、脈は反って沈遅。脈沈遅にして而してなお発汗法を用いるは、之れ瘧病と為す所以なり。また破傷風を治すも、葛根湯症と、ほぼ同じ。まさに脈の浮数と沈遅とを以て之れを断ずるべし」だから葛根湯との区別は脈ですんだというわけね。ただ栝蓼桂枝湯より葛根湯のほうが筋肉の緊張が強いでしょう。



吉益南涯の門人で中川修亭という人がいて、この人が弟子に金匱要略の講義をしたのがあ  
るがその中に軽い破傷風を治した例を載せている。だからこの処方桂枝加葛根湯よりも  
さらに虚証の場合に使う。「瘧」の病は発汗してはいけないことになっているんだよね。  
だから強壯の意味で栝蒌根を入れたところに意味があるでしょう。柴胡桂枝乾姜湯にも栝  
蒌根が入っていて強壯の意味と口渴を治すことでは共通している。柴胡剤で柴胡桂枝乾姜  
湯が一番虚証で陰証に使う薬だからね。

**桂枝加黄耆湯**（方極文）「桂枝湯証にして、而して黄汗、あるいは盗汗の者  
を治す」

「桂枝湯方内において、黄耆二両を加える。桂枝、芍薬、大枣、生姜（各四分五釐）甘草  
（三分）黄耆（七分五釐）右六味。水八升を以て、煮て三升を取り、一升を温服する。（  
水一合六勺を煮て六勺を取る）須臾にして熱き稀い粥一升余りを飲み、以て薬力を助け  
、温服して微汗を取る。若し汗せずんば、さらに服せ」

第一条：「黄汗の病にして、両脛自ら冷え、若し発熱するはこれ歴節に属す。食しおわり  
汗出で、また身常に暮れより盗汗出ずる者は、これ劳気なり。若し汗出おわり、反って発  
熱する者は、久久にその身必ず甲錯す。発熱止まざる者、必ず悪瘡を生ず。若し身重く、  
汗出おわって、やや軽き者は、久久に必ず身うるおい、即ち胸中痛む。また腰より以上、  
必ず汗出で、下に汗なし。腰\_\_弛痛すること、物ありて皮中に在るの状の如し。劇しき者  
は食すること能わず。身疼重し、煩躁し、小便不利するは、これを黄汗と為す」

昭和49年4月16日講義A面修了

(桂枝加黄耆湯の第二条から)

第二条：「諸病の黄家にて、但その小便を利すれば、たとえ脈浮にしても、まさに汗を以て之れを解するべし」

按語：「為則按ずるに、黄耆は皮膚の水気を主治するなり。薬徴にて考うべし」

これはいくつか切って考えた方がいい。先ず歴節までが一つ。それから労気までが一つ。それから悪瘡を生ずまでが一つ。まず黄汗の病から説明します。「黄汗の病」というのがあったのかな？汗が出ると着物が黄色に染まるという病気だろうから。「黄汗の病」というのは両方の膝から下が冷えるんだな。それで熱が出ると「歴節」になるんだと。歴節とは関節の病気だろうけどこれだけではわからないんだ。それでご飯を食べおわると汗が出るという。また夕方になると寝汗が出る。これを「労気」としているが疲れのことだな。そして汗が出たあとで、汗が出れば熱が下がるのに反って発熱する者は、またそれが長く続くと身体が甲錯するんだと。いわゆる鳥肌立ってきて潤いがなくてガサガサした皮膚になるという。そして熱がいつまでも治らないでいると悪い腫物ができる。もし汗が出たあとに身体が軽く感じる者で、しばらくすると筋肉がピクピクと痙攣をおこすようになり胸が痛くなるというわけだ。吉益東洞はこの条文の始めから括弧で囲っているからここはいらぬというわけでしょう。いらぬのであれば簡単だけどね。ハハ・・・そうゆうふう片づけるわけにはいかないよね。そして腰から上には汗が出て腰から下には汗が出ないと。それから腰\_弛痛というのは腰や臀部がゆるんだようにだるく痛いわけね。そして皮膚が麻痺したようになって皮膚の下にものが入っているように感じるんだ。その症状が劇しくなると食事ができなくなると。そして身が重くて煩躁し苦しくて小便が出ないのは「黄汗」の病なんだというわけだ。第二条はどんな病気にしても身体が黄色になるようであれば小便を出さなければいけないと。もしそのような状態で脈は浮いている場合は汗を出して治さなければいけないと。その時には桂枝加黄耆湯で治すんだと。

あんたたちは腹證奇覽翼の黄汗のところを読んだことがある？ない？じゃあ欄外を読んだ後で説明しよう。

○「甲錯とは、素問のいわゆる索澤にして、その甚だしきに至る。肌膚枯\_して、小麩片の如きもの起るなり」麩片というのは麦から出るふすまのことだ。ふすまのようにガサガサしているということだ。

○「\_は、臀なり。弛は、張弛の弛にて、解惰なり。按ずるに、正気通天論に云う。大筋

\_\_短、小筋弛長、\_\_短は拘となす。弛長は痿となす。この条はまさに解脩して痛むを以て之れを解するべし」解脩とはかったるいわけだ。そして大きい筋肉は短くなるということ。短い筋肉は伸びてしまうということだ。短くなったものは引きつれるようになり、伸びたものは力がなくなってしまうということ。そしてこの条は腰がだるくて痛いという意味にとったらいいだろうと言っている。

○「発黄・黄汗の二症にて、それを発汗すべき者は、この方を用う。温覆して汗を発すべし。子炳の云うに、まさに汗を以て解さんとする者は、この方の主さどる所にあらざるなり。誤りなりや。本条の方後の文に、あに明白にあらざらんや」

黄耆を我々が使う目標は皮膚の表面に水気があって、あるいは皮膚表面に皮膚病があって、皮膚の栄養が悪くて水痘やとびひがある場合に使うのよね。とびひというのはうつるんだ。寝汗がいつまでも止まないとか、ようするに皮膚の栄養状態がよくなく水気が停滞している時に使います。桂枝加黄耆湯の芍薬の量を多くしたら黄耆建中湯のようになるからね。それに当帰を入れれば帰耆建中湯になって肉の発生がうんと悪い怪我の後や手術の後に使える。傷をすると肉の盛り上がりが悪い人なんかは黄耆で血行をよくしてやると速く肉が盛り上がるんだ。身体でいえば表の虚証で身体の気血の運行の悪いところが目標だから。中耳炎なんかでも膿が止まることがあるしひじょうに応用が広い処方です。

それから桂枝加芍薬大黄湯は桂枝加芍薬湯の所でてきたから繰り返しません。欄外だけを読んでおきましょう。

(桂枝加芍薬大黄湯の欄外)

○「大黄は、宋版には二兩に作る。玉函には三兩に作る。大実痛は、大黄一兩のよく治するところにあらず。よろしく斟酌して用うべし」

○「痢疾にて、発熱悪風し、腹痛し裏急後重する者を治す」

○「この方に附子を加えて、桂枝加芍薬附子大黄湯と名づく。疝家にて、発熱悪寒し、腹中拘攣して、痛み腰脚に引き、あるいは陰卵\_\_腫、二便不利の者を治す。また乾脚氣、筋攣骨痛、あるいは十指冷痺し、大便難の者を治す」

「痢疾～裏急後重する者」とはつまりしぶり腹で下痢することです。裏急後重がある下痢は大黄と芍薬がどっさり入らないと効きめがないことが多いから。陰卵とは睪丸のことだ。すなわち睪丸炎のことだ。それで大便も小便も出にくい者。乾脚氣とは浮腫みがなくて足がしびれたりすること。筋肉が引きつれたり関節が痛んだり、十指だから手足の指が冷えてしびれる者、あるいは便が出にくい者を治すというわけだ。

## 桂枝加芍薬生姜人参湯

(方極文)「桂枝湯証にして、而して心下痞硬、身疼痛、及び嘔する者」を治す。

「桂枝湯方内において、芍薬、生姜各一兩、人参三兩を加える。

桂枝、大棗、人参(各六分)芍薬、生姜(各八分)甘草(四分)右六味。煮ること桂枝湯の如くにす」

第一条「発汗の後、身疼痛し、脈沈遅の者」

按語：「為則按ずるに、まさに心下痞硬、或は拘急、或は嘔の證あるべし」

○「方名を、桂枝加芍薬生姜人参湯に作るは、玉函経にとるなり」

玉函経ではこのように書いているけれど、傷寒論を見ると「新加」の字が書いてある。

○「疝家にて、寒熱交作し、心下痞硬し、胸腹攣痛する者を治す」

「疝家」とは「疝氣」を患う人のことで主として下腹部に痛みがおこってくる病気だ。

○「諸方の下に、まさに某々の證あるべしと云うは、本論にてその證備わらざるを補って、方用を拡充し、以て治術を資くるなり。これ東洞先生の体験の説にして、推測での筆下にあらざるなり」

この処方私は一二回しか使ったことがないけどね。神経痛などに使うんだ。脈が沈んで遅いとあるけどあまり痛い痛みではなくて軽い痛みで使うことがあるでしょうね。

伊藤質問：この処方に山椒が入りますと中建中湯のようになりますね。

大塚：そう。だから「仙家で寒熱が交作し」というところに使えることがわかるわね。

だからかなり虚証だろうな。脈も沈遅で弱いだろう。

## 桂枝加厚朴杏子湯

(方極文)「桂枝湯証にして、而して胸滿微しく喘する者」を治す。

「桂枝湯方内において、厚朴二兩、杏子五十子を加える。桂枝、芍薬、大棗、生姜(各六分)甘草、厚朴、杏仁(各四分)右七味。煮ること桂枝湯の如くにす」

第一条「喘家は、桂枝湯を作りて、厚朴杏子を加えるを佳となす」

第二条「太陽病、之れを下して微しく喘する者は、表未だ解せざるなり」

処方の薬味の分量のことですが、ここで杏仁が五十個と書いていますがそうとうの分量になるでしょう。実際にその分量だとすれば他の薬の量とのつり合いを考えてみて書くとおり甘草と杏仁の分量を等分に割り当てると甘草の量が大変な分量になるでしょう。ここがいつも問題になっているのだけど昔はこれでよかったのかもしれない。徳川時代に昔の方法でやったら薬が多くなって水の量が少なくなり實際上役に立たなかったんだ。

だから皆が色々考えたために度量衡に関する説がたくさん出ているんだよね。幕末に考証学派の鍵屋易齋?なんかが出てきて『薬の分量は神農の秤』と言い出して十分の一の量だと言い出したんだ。そうするとぴったり合うんだ。薬に関しては十分の一で測る特別な度量衡があったんだと言ったんだ。ところが実際にこのような具体的な箇所が出てくると困るんだよな。

吉本：先生！いま大塚医院でも杏仁を入れることがありますね。それでよく見てみれば杏仁が二十個くらいは入っているように思いますが。くだいてありますのでわかりにくいですがそれくらい入っているように思いますが？

大塚：そうかな～。そんなに入っている？・・・この桂枝加厚朴杏子湯という処方では体質の弱い子供の風邪をひいてゼーゼーと咳が出るような場合に使うんだ。強い気管支喘息のような場合は使わないんだ。胃腸のあまり丈夫でないようで年中風邪をひいているような子供にふだんからのましておくと風邪をひかなって丈夫になるんだよ。麻黄剤が使えない場合だ。それにこの処方は飲みやすいんだ。

○「もとより喘の症があるを、喘家と謂う。喘家にて桂枝湯症をあらわす者、この方を以て汗を発すれば則ち癒える。若し喘は邪に因ってその勢い急し、邪は喘に因ってその威盛んなる者は、この方の得て治するところにあらず。よろしく他の方を参考にして、以て治を施すべし。拘拘たるべからず」

ようするに喘息でも発作がひどい場合ではなくて、ふだんから風邪をよくひいて困る場合にのましておればいいんだ。

**烏頭桂枝湯**（方極文）「腹中絞痛し、手足逆冷、或は不仁、或は身体疼痛するを治す」

「烏頭五枚、右一味。蜜二斤を以て、煎じて半に減じ、滓を去り、桂枝湯五合を以て、之れを解く。一升を得て後、初め二合を服す。知らざれば、即ち三合を服す。また知らざれば、また加えること五合に至る。その知る者は酔状の如し。吐を得る者、病に中ると為す」

第一条「寒疝。腹中痛、逆冷、手足不仁、若し身疼痛し、灸刺諸薬にて、治すること能わずは、抵当この方を用う」

按語「為則按ずるに、これ烏頭を煎じて、而して桂枝湯と合わす方なり。まさに烏頭煎方の下に列すべし。今之れを桂枝加附子湯に列すは、その異なりを示すなり。また按ずるに、煎法は大烏頭煎の法に因るべし」（烏頭三錢。右一味、蜜一合二勺を以て、煎じて半に

減じ、桂枝湯六勺を以て、之れを和解し、六勺を服す。知らずんば更に六勺を服す)

烏頭桂枝湯は腹が絞るように痛むわけだな。そして足がひじょうに冷える。そして麻痺してしまう。麻痺があって身体が痛い。ここでは烏頭五枚とあるから相当の分量があるね。蜜を入れて烏頭を煎じ、桂枝湯を別に煎じて後で一緒にする。「知らざれば」というのは服用して何ともなければという意味。少しずつ服用量を増していくのは烏頭の瞑眩を意識しての服用法だ。「知る者」とは烏頭が効いてきた者という意味。そしてこの薬を服して吐く者は病に的中している者だというわけだが、これは烏頭や附子の中毒症状だな。注意しなければいけない。こないだの日曜日に診た患者で附子を一合の匙でしか入れていないけれども服用したら酒に酔うたようになってドキドキしだしてくると。しばらく休んでまた服用したら同じような症状が出て今寝込んでいるという電話があった。これも附子の中毒だよ。それで起きれるようになったら薬を持ってきなさいと伝えておいた。うちの（大塚医院の）附子は全部修治し直して炒ってあるし、分量としたら0.5グラムくらいしかないわけだし、その他の大勢の患者にも使っているのだからどうということだろう。その人だけそうやってきたのだから附子に対する特異体質があるかもしれない。初診だったからその点はわからないけど。まさか附子の分量を多く入れたわけでもないだろうしね。

大野：八味丸だったんですか？

大塚：そうじゃない。人参湯と真武湯の合方だったんだよ。薬を持って来てくださいと言ってあるから。・・・ここでは烏頭桂枝湯とあるから処方からすれば桂枝加附子湯のようなものだよね。この頃、問屋から来る附子は白川附子だから烏頭のようなものだね。ただ傷寒論では烏頭は使っていないけど金匱要略では烏頭を使っている処方がたくさんあるんだ。特に鎮痛を目的とするところは烏頭が使われている。だから烏頭のほうが鎮痛作用が強いのか？附子ではいけないのか？傷寒論の中では烏頭をどうして使わないのか？そして金匱要略の中で烏頭と附子が両方とも入っている処方があるのはなぜか？などの問題があるんだ。そのことに関してこの前、木村雄四郎さんやら矢数圭堂さんに聞いたけれども知らんと言っておった。わからんて！

「寒疝」というのはひじょうに冷えるということでそこが重要になってくる。冷えて腹が痛いわけで上腹部より下腹部の方が痛むことが多い。「逆冷」とあるからうんと手足が先の方から冷えてくる。しびれがきたり身体が痛いこともある。灸や鍼をしても治らないと。「抵当」の意味が問題で「当にあたるべし」と読むこともできるし「抵当丸」という処方から考えられるように「ヒル」のことだとの説もある。けれどここでは「ヒル」では意

味は通じないんだ。欄外を読みましょう。

○「陶弘景の曰く。附子烏頭若干枚、皮を去りおわり、半両を以て一枚に準ず。古人の用いるところの烏附は、皆野生にして、培植の品にあらず。故に然り、今一枚を以て一兩に準じ、分量に注す」

○「按ずるに、後は、千金には許に作る。是なり」

○「知るを以て度と為すは、靈樞の客邪篇に見ゆる。楊子方言に曰く。知は、癒えるなり。この条、知は瞑眩を謂うなり」

○「按ずるに、身疼痛は、千金に一身ことごとく痛むに作る。抵当の二字なし。共に是なり」

○「寒疝。臍をめぐる痛む。上りては心胸に連なり、下っては陰囊に控え、苦楚忍ぶべからず。手足逆冷し、冷汗流れるが如き者は、この方にあらずんば、救うこと能わざるなり」ここは非常に腹が痛んで上は胸の方が痛み、下は陰囊の方まで痛む。手足が冷えて冷や汗が流れるような者はこの処方でないで治すことができないというわけね。

○「疝は水毒なり。その発の多くは外感より来る。然れども或は瘀血を兼ね作る者あり。或は蛔虫をはさみて動く者あり。或は宿食に因って発する者もあり。處療の際、よろしく甄便して手を下すべし」色々な原因があるということ。回虫で痛むこともあれば瘀血によることも食べ過ぎから痛むこともあるということ。

○「東洞先生の曰く。煎法は大烏頭煎の法に従うべし。然れども余はつとに本論の煎方に従う。唯分量と服度は、意を以て裁酌するのみ」